

大規模災害時の災害時要援護者への安全な搬送システムの研究

友保 洋三

白鬚橋病院 リハビリセンター長

【ポスター -1】

白鬚橋病院をまずご紹介しますと、墨田区にある病院で、月に600台の救急車が来ます。二次救急をやっているのですが、24時間体制で外来にどんどん来てしまうというところなんです。

私は整形外科です。もう、歳なのですが、手術はバイトの先生に任せて、外来だけで1日大体70、80人を診る。そうすると、3時間待って、「はい、薬出すね」と、20秒で終わってしまうような病院です。実際には下町の病院は、そういうところなのです。合間に救急にかなりの酔っぱらいとか、いろいろな人がけがをして来ます。それで、大腿骨頸部骨折の手術も週に5つくらいあるわけですが、そういう中で、白鬚橋病院は災害に対して積極的に応じている病院です。

大災害が起きたときに一番大きい問題になるのは、災害弱者をどう搬送するかということです。近年、想定外の災害が非常に多く、「想定外であったから、うまいこといかなかった」というような逃げ口上があるのですが、それではやはりだめだろうということで、搬送についての問題点を上げていこうということにしました。

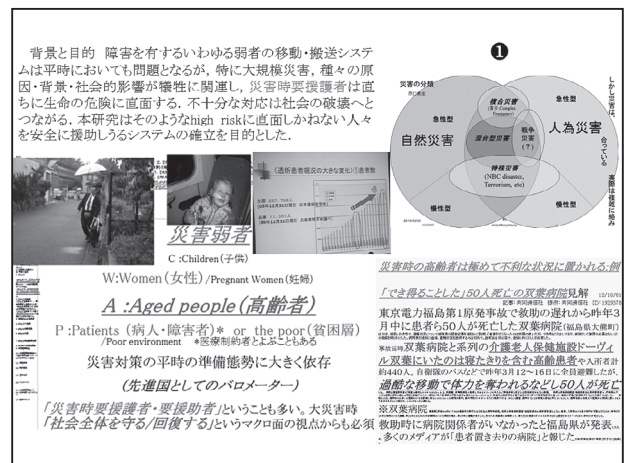
災害学の中ではシーワップ (CWAP) と呼ばれますが、ChildrenとWomenとAged peopleと、それからPoor peopleあるいはPatients、そういう人たちが災害時には非常に窮地に立たされますので、その人たちにどう対応するかというのが、災害にあっては常に問題になるところです。

災害学の中ではシーワップ (CWAP) と呼ばれますが、ChildrenとWomenとAged peopleと、それからPoor peopleあるいはPatients、そういう人たちが災害時には非常に窮地に立たされますので、その人たちにどう対応するかというのが、災害にあっては常に問題になるところです。

災害もいろいろな種類があります。大きく分けて、自然災害と人為災害。それから急に起こる場合と慢性に起こる場合。いろいろありますけれども、実際にはこういうものが非常に複雑に絡みあっていますから、それぞれの対応をマニュアル化することは非常に難しい。そして、災害時に特に高齢者は、私も高齢者に入りますので非常に分かるのですが、まず移動が非常に難しい。自分では動けない。そういう年齢になったときに、災害時に誰か援助がないと動けないというような状態になるわけです。

それで、今回の東北の地震でも、病院からバスで避難する途中で、何人もの方が亡くなるという悲劇が起こったわけです。そういうことに対して、「想定外だったから、全てしょうがないんだ」ということで片付けられるかどうか。それが、やはり大きい問題です。

ポスター 1



【ポスター -2】

それで、われわれがいろいろな訓練をやったり、実際に行ったりしたところ、例えばヘリコプターで1人の患者を運ぶために、これだけの人がいる。5、6人は絶対にいるわけです。そういう人海戦術でやらないとだめなのですが、災害時にこんなことはなかなかできないと思います。でも実際はこれしかないわけです。

それからもう1つは、特にレスピレーターが着いているような人をどうするのか。一番よくあるのは、ICUにいる患者さんはいろいろな管を付けているので、そこが火事になって火が向こうから来たときに、本当にその患者を引っ張って逃げるができるのか。そういうことに関しては、まだ全然結論が出ていない。

【ポスター -3】

それからもう一つ、例えば岩手の地震のときに、これは共同研究者の原口が行ったのですが、土砂が崩れてぬかるんだところへ医療救護隊が入って行って、日頃訓練も何もやっていない先生たちが長靴もなしに運んでくるわけです。そういう状態で、動けるかと言ってもなかなか動けないというような問題が非常にあります。

【ポスター -4】

そういう状態の中で、最近、チヌークというローターが2つ付いている大きいヘリコプターが、あの御嶽山のとときに初めて出て行きました。大量輸送です。患者さんをいかに大量に同時に運んでいくか。今まで小さいヘリコプターしか出なかったのですが、これでは災害のとき合わないわけです。今後はこういう大きいもので、同時に何人も運べるシステムを考えなければならないだろうということも言えます。

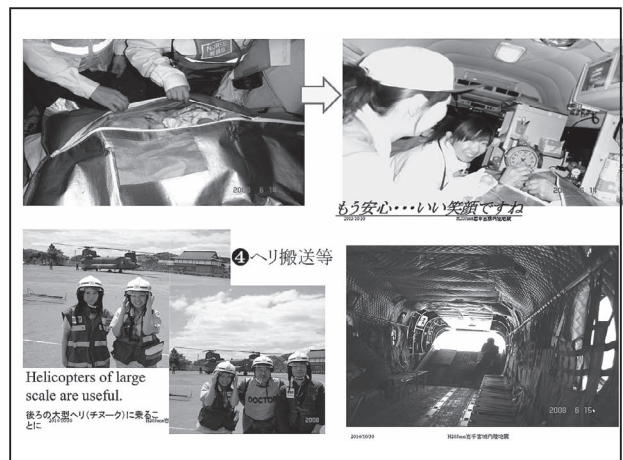
ポスター 2



ポスター 3



ポスター 4



もっと最近問題になってきたのは感染症です。エボラが今世界中に蔓延しかけていますが、日本にも空港を介して入った場合はまだ防御体制はある程度できていますが、インフルエンザのときは水際作戦で止めようとしたのですが、後から考えてみれば、すでに入っていたわけですね。そういうことも起こりました。それで、エボラも今問題になっているのは港なのです。アフリカ辺りに寄ってきた船が地方の港に入って、そのときにどう防御するんだということがまだ全然考えられていない。そういうことに関してもやはり今後考える必要があるだろうということが言えるわけです。

【ポスター -5】

それから、医療従事者側の対応の訓練です。これは私がいた災害医療センターのシャワーです。病院の外に非常に大規模なシャワーを設けて、汚染された患者は全部そこで洗うとか、それからプールがあってプールの中をいったん潜ってもらってから病院内に入れるとか、そういう非常にしっかりしたシステムがないとだめです。

また、常に訓練をしなければいけない。防御服を着て患者を洗う練習とか、そういうことを日頃からよほど訓練しないとやっていけないということが、非常に懸念されました。

【ポスター -6】

あとはいろいろな方法があるのですが、ドライブスルー方式。これは皆さんご存じか知りませんが、車の中に患者さんを閉じ込めてしまうわけです。窓をそっと開けて外部と交通するということになる、感染のリスクが非常に減るわけです。患者と直接にタイアップしてマンツーマンで当たると感染が広がりますから。そういう訓練を病院が常にやらないとだめだということです。

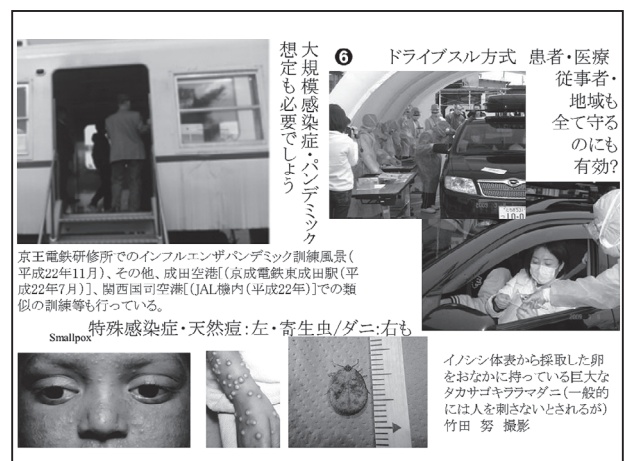
他にいっぱいあります。怖い病気や、エマージェンシーウイルスとか、そういうものに対しての医療面からの対応方法が、なかなかまだ進行していない。その上に、先ほど申したように、想定外の大規模な災害がここ数年どんどん起きてきています。

そういうことを日頃から病院がやっていけるだけの余力があるかということ、ほとんどの先生方は「日頃の診療に時間を要して、こんなことを考えている暇はないよ」とおっしゃ

ポスター 5



ポスター 6



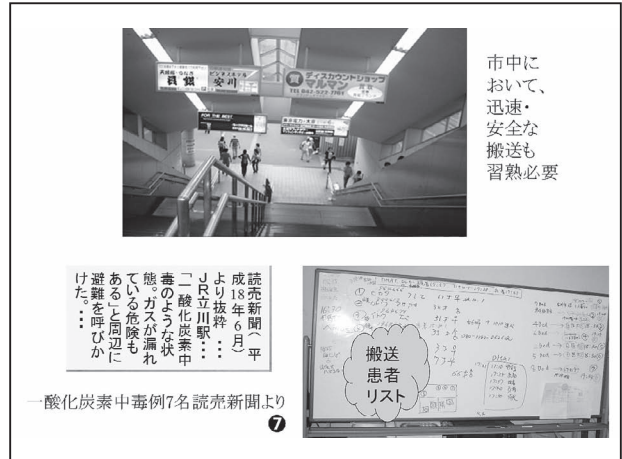
るのが普通ですが、でも、こういうことを基本的に考えていかないと、日本の災害医療は対応できないだろうということです。

【ポスター-7】

また、患者搬送のリストです。

先ほどの病院で患者さんをバスに乗せて送ったところ、行方不明になってしまったのです。病院と送られた患者さんとのコミュニケーションが全く0になって、1カ月くらいかかってやっと、「皆あそこに避難したんだな」というのが医療側の調べで分かった。こういうことも日頃の訓練をやっていないと対応できないだろう。

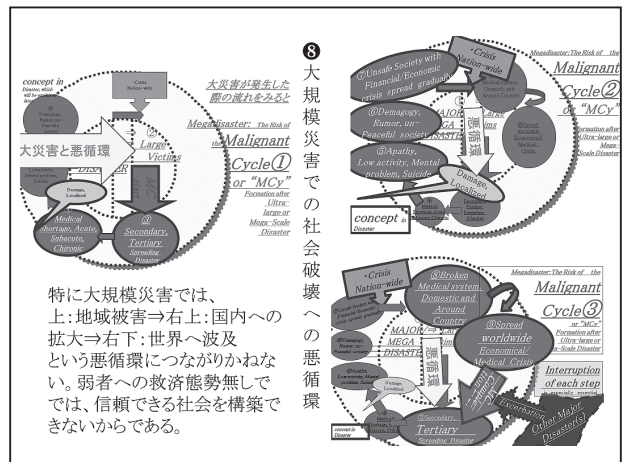
ポスター7



【ポスター-8】

結局、基本的に、大規模災害が起こったときに、医療の患者への対応が遅れ、特に災害弱者がいろいろな面でやられた場合に、その地域の社会が崩壊するわけです。地域が崩壊すると、その次はその県が崩壊する。もっとひどくなると、心理的なものも含めて、日本全体の崩壊が起こる。それがさらに世界に波及すると、地球全体が気分的に沈んだり、経済的にもやられたり。そういうことが起こるのであることが懸念されるのが、災害時の悪循環なのです。

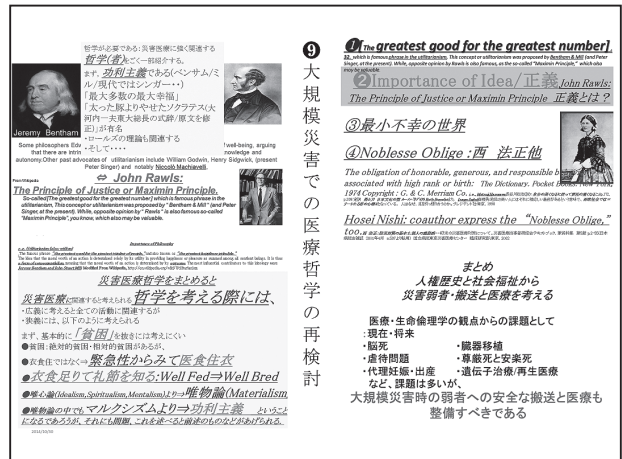
ポスター8



【ポスター-9】

結局、最終的には災害哲学が必要である。先ほどのご発表でも、糖尿病の治療で、「効果的なものを出せばよい」というようなものの考えではだめだということでしたが、言ってみれば一種の哲学が必要であろう。そういうことがこの最後のポスターに書いてあるわけです。

ポスター9



大規模災害時の医療には、最大多

数の最大幸福（ベンサム・ミル：功利主義）が、従来主張されてきている。

その概念は、軽視すべきでないが、しかし、しばしば災害弱者が見捨てられてもよいという意見に進みかねない危険性を伴う。

弱者へも温かい援助も必要であり、それにはロールズのJustice論やセンの哲学、最少不幸の世界（菅）、Nobless Oblige(西法正、他)、ひいては、現在注目を浴びているピケティへの考えも加える必要があると考えております。

質疑応答

会場： 共同研究をしている者ですが、補足します。先ほどの感染症の関係で Dengue 熱だとか、あるいは毒グモとかも問題になっています。インフルエンザもそうですが、やはりエボラは問題だろうと思うのです。

少し話がずれてしまうかもしれませんが、エボラで一番心配されているのは、中国の人が日本と行き来が多くて、その中国の人がアフリカでものすごく働いていることです。日本人は何十人か何百人かいるかもしれませんが、たぶん2桁くらい多い数の中国の人が向こうで働きます。中国ももちろんですが、中国経由で日本にも入ってくるかもしれない。そういうようなことになりましたと、要援護者への搬送システムというのとはちょっと話がずれるかもしれませんが、搬送体制全体を要援護者も災害弱者も含めてみておかないといけない。災害の時には、また予想外のことが起こって「想定外だったから」ということでは済まないのではないかなと思っているということを、最近のことに合わせて補足させていただきます。

座長： ありがとうございます。災害はどこかで日々起きてきている問題であり、災害哲学が必要とのご発表をありがとうございました。